

コメディリック第2回「ただのホラー」

「不屈の心」

登場人物

岡本 ミーニイ・アイリツシユ

齋藤 野彦

刑事 ペイリー・チャイルド

がちやロ テオ・ポー

大赤子 シロスコフ

※岡本、板付き

【L・明転】

暗く佇んでいる岡本

刑事 「おい！ちゃんと歩け！」

※刑事、齋藤、登場

刑事に連れられて、手錠と黒いジャンパーをか
けられた齋藤が来る

刑事 「岡本さん、ご希望通り連れてきました。
た。こいつがあなたをストーカーしてい
た犯人…齋藤です」

齋藤の顔を見つめる岡本

刑事 「本当に面識はないんですか？」

岡本 「はい」

刑事 「そうですか。こいつが仕事を終えた岡
本さんを執拗につけまわし」

齋藤 「朝の通勤もです」

刑事 「玄関とリビングに盗聴器をしかけ」

齋藤 「トイレとロフトにも仕掛けました」

刑事 「岡本さんのマンションの合鍵を作り、
部屋に侵入していました」

齋藤 「ここ最近屋根裏に住んでました」

刑事 「さっきの取り調べで白状しとけや…！
これから齋藤が岡本さんの家から盗んだ

証拠品を確認してもらいますが…本当に
いいんですね？」

岡本 「はい。自分の目で確かめたいので」

刑事 「わかりました…（齋藤へ）勿論だが、
この部屋には監視カメラがある。妙な真

似をしたら撃ち殺すからな」

刑事、部屋を出る

岡本、すすり泣く

「…どうして、どうして私なんかをスト
ーカーしたんですか…？」

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

沈黙を守る齋藤

岡本 「もつと綺麗な人は沢山歩いてるし…私の会社だつて…受付のサクラちゃんとか經理のハルミちゃんとかの方が若くてよっぽど可愛い…なんで…なんでよりによつて私なんですか…」

問

齋藤 「…あなたが…あなたが美しいからです」

岡本 「…え？」

[M・SWEET MEMORIES—C]

齋藤 「あなたは夜の空に浮かぶ一筋の流れ星のように美しい」

岡本 「やめてください」

齋藤 「あなたの美しさは流れて消えることなく輝き続け、月よりも僕の心を照らしてくれる」

岡本 「やめてください」

齋藤 「たとえ空が闇に覆われてもあなたの光さえあれば僕は何もいらぬ」

岡本 「もうやめて！」

齋藤 「あなたを…あなたを諦めることができないのです」

岡本 「私の…私のことをそんな風に思つてくれる人がいたなんて…」

岡本、目を瞑りキスをせがむ

齋藤、岡本へキスをしようとする

刑事が入ってくる

刑事 「岡本さん」

[M・SWEET MEMORIES—CO]

離れる二人

刑事 「これはあなたの下着ですね？」

刑事、下着を見せる

岡本 「はい。私の下着です」

刑事 「大量のあなたの下着がこいつのベッドに敷き詰めてありました」

岡本 「え」

刑事 「こいつ、相当な変態野郎だよ」

岡本 「気持ち悪い…」

刑事 「すぐに豚箱にぶちこんでやるからな」

刑事、部屋を出ていく

岡本 「やっぱり最低ですね」

沈黙を守る齋藤

岡本 「サクラちゃんやハルミちゃんならまだ

しも…私の下着に何の価値があるっていうんですか！」

「あなたの下着はダイヤモンドだ！」

「え？」

[M・SWEET MEMORIES—C—]

齋藤 「ルビー…サファイア…エメラルド…どんな綺麗な宝石もあなたの下着には敵わない」

「やめてください」

「マリー・アントワネットが宝石を愛したように僕はあなたの下着を愛している」

「やめてください」

岡本 齋藤 「あなたの下着に包まれることで、僕は王様のような気分になれる」

岡本 「もうやめて！」

齋藤、下着を手に取り

齋藤 「誰よりも私にはあなたの下着が必要なのです」

「…私の下着にそんなことを感じてくれる人がいたなんて…」

岡本、目を瞑りキスをせがむ

齋藤、岡本へキスをしようとする

刑事が入ってくる

刑事 「岡本さん」

[M・SWEET MEMORIES—C—]

離れる二人

「これはあなたの歯ブラシですね？」

「はい。私の歯ブラシです」

「こいつ、食事の際にこの歯ブラシを箸の代わりにして飯を食っていたようですよ」

岡本 「なんてこと…」

刑事

「刑務所でまともなご飯が食べられると思
うなよ。へドロしか配給しねえからな」

刑事、部屋を出ていく

岡本

「普通の人の神経じゃない」

沈黙を守る齋藤

岡本

「サクラちゃんやハルミちゃんの歯ブラ
シならまだしも、私の歯ブラシでご飯を
食べるなんて…」

齋藤

「あなたの歯ブラシで無ければ僕はご飯
を食べれない！」

岡本

「え？」

[M・SWEET MEMORIES—C—]

齋藤

「あなたの歯ブラシが僕のただただ孤独
なグルメを救ってくれた」

岡本

「やめてください」

齋藤

「歯ブラシの魔法がしいたけをトリュフ
に変えてくれる」

岡本

「やめてください」

齋藤

「寧ろ歯ブラシだけで生きていける。歯
ブラシで空腹が満たされる」

岡本

「もうやめて！」

齋藤

齋藤、歯ブラシをしゃぶりながら

齋藤

「僕の最後の晚餐…それはあなたの歯ブ
ラシだ」

岡本

「…私の歯ブラシを最後の晚餐に選んで
くれる人がいるなんて…」

岡本

岡本、目を瞑りキスをせがむ

齋藤

齋藤、岡本へキスをしようとす

刑事

刑事が入ってくる

刑事

「岡本さん」

[M・SWEET MEMORIES—C—]

刑事

離れる二人

刑事

「これはあなたが鼻水をかんだティッシ
ユですね」

岡本

「嫌だ」

ティッシュを見せる刑事

岡本 「気持ち悪い…」
齋藤 「あなたの鼻水はシャンパンだ！」
岡本 「え！」

[M・SWEET MEMORIES—C]

刑事 「岡本さん、これはあなたが噛んだガム
ですね」
岡本 「嫌だ」

[M・SWEET MEMORIES—CO]

ガムを見せる刑事

岡本 「流石に無理」
齋藤 「あなたのガムは永遠に味がする！」
岡本 「え？」

[M・SWEET MEMORIES—C]

刑事 「岡本さん、これはあなたが入った後の
湯船ですね」
岡本 「これはない」

[M・SWEET MEMORIES—CO]

湯船(ペットボトル)を見せる

岡本 「変態！この変態男！」
齋藤 「あなたのダシが出たお湯を飲みたかつ
んだ！」
岡本 「え？」

[M・SWEET MEMORIES—C]

刑事 「ふざけんな！もうこっち来い！」
齋藤を連れて行こうとする刑事

齋藤 「諦めたくなかった…どんな形だろうと
あなたに近づきたかった…僕はあなたを
諦めたくない！お願いだ！僕を受け入れ
て欲しい！」

刑事 「何言ってるんだ！撃ち殺すぞ！」
齋藤 「あなたを愛してる。愛してる！」
刑事 「てめえこの野郎！（殴る）世界中のカ
ップルに謝れ！来い！」

「待って！待ってください！」

[M・SWEET MEMORIES—CO]

岡本 「お願いします。刑事さん…その人を連れ
ていかないで…」
刑事 「岡本さん、どうしたんですか？」

岡本 「いや、その…」
刑事 「この男を許すっていうんですか？」
岡本 「それは…」

笛を吹く齋藤

[M・marry you—O—]

刑事 「何やってんだ！おい！」
岡本 「え、なにこれ」

※がちゃ口、大赤子、登場

がちゃ口と大赤子が現れる

刑事 「何だお前ら！」

いい感じのところで踊りだすがちゃ口と大赤子

いい感じのところで踊りだす齋藤

岡本 「ごめんなさい！やっぱりごめんなさい！」
刑事 「てめえらこの野郎！」

ピストルを放つ刑事

大赤子が刑事の首を絞める

刑事 「かあ…かはあ…」

息絶える刑事

怯える岡本

花束を差し出す齋藤

齋藤 「僕と結婚してください」

岡本 「いやあああああ」

逃げ去る岡本

間

急いで追いかける齋藤

[M・marry you—E O]

がちゃ口 「そうだ。齋藤。諦めんな」
大赤子 「あああああ」

【L・暗転】

—完—